浮世絵で楽しむ邦楽
大谷コレクション2

河竹黙阿弥の世界

大谷コレクション第2回は、没後130年を迎える河竹黙阿弥の世界をお届けします。演奏会を前に今回取り上げる黒御簾音楽の妙味について、長年歌舞伎制作に携わっておられる松竹株式会社 岡崎哲也さんにご寄稿いただきました。

「黒御簾音楽の生命」

歌舞伎芝居の音楽で、主に長唄とお囃子の演奏家によって演奏される「黒御簾」は特別な存在である。舞台下手にある、そう広くもない芝居のオーケストラ・ピット、黒御簾で演奏されるので其の名があるが、「黒御簾」は単に伴奏音楽ではない。俳優の演技に音を附けてゆく仕事は、オペラのレチタティーヴォやアリアを指揮者のタクトで伴奏するに等しい印象がある。新作ではどの場面でどの曲を演奏するかは芝居を知り尽くした附師の領分だが、古典の作品ならば、おおよそ決まった曲が指定されている。だから伴奏音楽のように見えるのだが、黒御簾の最大の苦心は、コンサート・マスターにあたる舞台師（三味線や歌の首席演奏者）が、演奏者であると同時に指揮者の能力も備えていなければならない点にある。

芝居にアクセントを与え、舞台を高揚させる

河竹黙阿弥が明治十六年に書いた「魚屋宗五郎」。主人公が禁酒を破り、はじめは茶碗で一気に飲み、もう一杯飲んで、久方ぶりの酒がまわって酒乱が始まり、片口で呑み、ついに角樽を飲み干し大暴れになる。初演の五代目菊五郎以来、流れるような芝居の段取りがついているが、黒御簾から聞こえる「西行桜の合方」が、飲酒の芝居を支える。はじめはサラリと弾かれ、酔いが増すに従ってテンポと量感が増してゆく。俳優のセリフの邪魔にならぬよう（「セリフを拾う」と言う）気を配りながら、三味線はクレッシェンドしまたアッチェレランドする。宗五郎の眼がすわり空になった角樽をポンと置くと、江戸の祭礼の浮かれ囃子の「四丁目合方」になる。主人公の宗五郎は暴れまくり家を飛び出し、花道の七三で樽を掲げて見得をし、憤怒の相で向こうへ入る。舞台師は、これらすべての芝居を眺めながら、絶妙なデュナーミク（強弱）とアゴーギク（テンポの変化）で黒御簾のメンバーをリードしながら演奏する。すなわち指揮をしながら演奏するのである。演技の邪魔をせず、芝居にアクセントを与え、舞台を高揚させる。

細い御簾の間から俳優の動きを凝視

芝居の国で「四谷さま」と呼ばれる「東海道四谷怪談」に、不実な夫の犠牲になる妻のお岩が毒薬を盛られたと知らず、身繕いする「髪梳き」の場面がある。「瑠璃の艶」という楽曲を此処では唄の舞台師が独吟（ソロの歌唱）で歌い、三味線が伴奏する。少なくとも明治二十年代から不変の演出で、お岩が化粧道具を持ってこいと言うと〻竹垣の草に…という一の句が奏され、髪梳きにとり掛かると〻露に湿りて…の二の句、セリフのやりとりの間が〻朝、夕べに面痩せし…の三の句で、梳きあがる瞬間が〻花が花なら、ものは思はじ、となる。歌も三味線も舞台師は黒御簾の細い御簾の間から俳優の動きを凝視し、気持ちに寄り添い、それこそ髪ひとすじの狂いなく「瑠璃の艶」を奏する。間合いと空気を読みながら、音楽で芝居を包むのだから、明らかに伴奏の域を超越した、「指揮しながら演奏する」バロック・オペラさながらの藝術に他ならない。

江戸と上方の色を弾き分ける

また芝居の国には、江戸と上方、東西の演目があるので、自ずと「黒御簾」の演奏にも風土の違いがある。近松原作を改作した「心中天網島」の「河庄」。主人公の治兵衛を弄りに善六、太兵衛という敵役の花道の出に、十代目杵屋六左衛門の名曲「八島官女」の〻友のぞめき…の唄の前の三味線が演奏される。大坂の廓の喧騒が見事に拡がってゆく。これを最初に使った俳優や附師の感性に頭が下がるが、こんな楽曲はふだん江戸の鰤背な芝居を弾いている演奏者だと、なかなか上方の色にならない。上方の俳優からは、「あのね、もっとドヤドヤと弾いてくれないと。匂いが違うのよ」とダメが出る。テクニックだけでは答えの出ない、「黒御簾」は重労働である。

俳優によって違う芝居のイキ

映画俳優として大活躍した勝新太郎さんと昔、柳橋で夜通し飲み明かした。近代

慶應元年8月市村座「処女評判善悪鏡」豊原国周画

の名人、杵屋勝東治師の次男であり、若い頃は杵屋勝丸を名乗って三味線を弾いていた。十代の頃、芝居の黒御簾に出入りし勉強した。六代目菊五郎の「め組の喧嘩」で、いよいよ妻と子に別れ喧嘩に赴く浜松町の辰五郎の引っ込み。チンチリ、トチチ、チンチリ、トチチ…と勝さんは爪弾きで弾いてみせ「この頭のチンチリをさ、芝の先生(菊五郎)は、これが女房、子供と永遠の別れだから、肚で泣いて弾いてくれ、二足、三足で、そいつを振り切って、サーッと走り出すんだから、足を見て弾いてくれって言ってたね。六代目さん、上手かったなぁ」と嬉しそうに語っていた。初演者五代目菊五郎の辰五郎を観ている今ひとりの名優十五代目羽左衛門だと「体を見ないで、勢いひとつで弾いてくれ…だったそうだよ。親父(勝東治師)から聞いた」というから答えはひとつではない。これも黒御簾の妙味だろう。同じ演目、同じ場面でも初代中村吉右衛門の机下で育った俳優と六代目尾上菊五郎の机下で育まれた俳優とでは、芝居のイキが違い、寸法も違う。幕内の言葉で「学校が違う」と言う。播磨屋のロマンティシズムと六代目のリアリズム。これを私は幼い頃、近くにお住いのあった杵屋栄二師から随分聞かせて頂いた。「播磨屋の旦那を弾いていると自然と時代になる(たっぷりと少し粘って弾く)のでね、六代目さんのお芝居を見ると随分さっぱりしたように思いました。でも時間(上演時間)はそう変わらないんです。播磨屋さんは、うんと芝居を為さるとこと、捨てる(あっさり運ぶ)とこがおありでした」。日本有数のメルクリン(鉄道模型)のコレクターだったので、栄二さんの稽古場の床の間は一面のジオラマだったが、その広間でうかがった話である。菊五郎と吉右衛門はクラシック音楽で言えばトスカニーニとフルトヴェングラーに当たるわけだが、このクラスの俳優の黒御簾を弾くのは、並大抵の事ではなかっただろう。今回の催し、「大谷コレクション2 河竹黙阿弥の世界」の主役である杵屋巳太郎さんは、その「黒御簾」を四十年間、弾いている。此処に、伝統歌舞伎の有難みを思う。

岡崎 哲也(松竹株式会社 常務取締役 演劇本部顧問・東京交響楽団理事長)

© 松竹株式会社

15代目市村羽左衛門「め組の喧嘩」辰五郎

浮世絵で楽しむ邦楽 大谷コレクション2 河竹黙阿弥の世界

[演目]
お話「河竹黙阿弥の女たち」渡辺 保

黒御簾音楽で聴く河竹黙阿弥
演奏　尾上菊五郎劇団音楽部
対談　杵屋巳太郎、渡辺 保

長唄「茨木」
杵屋勝四郎、杵屋巳太郎　他

3/13 (月) 18:30

※公演開催についての最新情報は紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。

邦楽主催公演 2023 年度前期 ラインナップ

2023 4月15日(土) 14:00
紀尾井たっぷり名曲6　長唄
二人椀久・鷺娘
杵屋東成×杵屋勝禄
【出演】唄　杵屋東成、今藤長一郎、杵屋禄三、杵屋正則、杵屋勝四助
三味線　杵屋勝禄、今藤美治郎、杵屋禄宣、杵屋勝国悠、杵屋勝司郎
囃子　藤舎呂英社中
解説　児玉竜一
【演目】長唄「二人椀久」「鷺娘」

杵屋勝禄

杵屋東成

2023 5月31日(水) 14:00
和生・勘十郎・玉男三人会〈第二回〉
【出演】太夫　竹本錣太夫、豊竹呂勢太夫
三味線　鶴澤清介、竹澤宗助、鶴澤清方(胡弓)
人形　吉田和生、桐竹勘十郎、吉田玉男
吉田玉延、吉田簑紫郎　ほか
聞き手　児玉竜一
【演目】「恋女房染分手綱　重の井子別れの段」
「伊賀越道中双六　千本松原の段」
座談会

吉田玉男

桐竹勘十郎

吉田和生

2023 6月17日(土) 14:00
新 紀尾井素踊りの会　第四回
西川箕乃助
【出演】立方　西川箕乃助
清元　清元清栄太夫、清元栄吉　ほか
囃子　堅田新十郎社中
地歌　富山清琴
お話　渡辺保
【演目】清元「玉屋」
地歌「ちょんがれ一休」

© 篠山紀信
西川箕乃助

2023 7月2日(日) 14:00
豊澤富助をきく会
【出演】浄瑠璃　竹本千歳太夫
三味線　豊澤富助
聞き手　渡辺保
【演目】義太夫節「仮名手本忠臣蔵　九段目　山科閑居の段」

豊澤富助

竹本千歳太夫

※公演開催についての最新情報は紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。